

Gen Kato Fund 海外派遣報告書

氏名	森下 啓太郎
所属教室・職（学年）	附属動物病院・助教
派遣場所	コロラド州立大学
派遣期間	平成 29 年 11 月 29 日～12 月 3 日

活動概要

今回のコロラド州立大学（CSU）への訪問は、これから始まる CSU への学生派遣を見据えた情報交換と相互理解が主な目的でした。滞在期間中には、北大の学生が実際に過ごすであろう附属動物病院を見学し、病院内での学生教育の実態を知ることができ、そのレベルの高さに大きな感銘を受けました。



学生 2 人ペアとなり、抜歯のトレーニングをしている様子

病院長の Hackett 先生の案内で、学生実習の様子を見学させて頂きました。そこでは学生が実際に犬の頭部を用いて抜歯の練習をしていました。私は学生時代に「抜歯の方法」を習ったことはなく、獣医師になって初めて先輩から教えてもらいました。最初はコツが掴めず苦労しましたし、その病院で行われている方法や使われている道具や機械が、果たしてスタンダードなものなのか分かりませんでした。同じく、「大学では習っていないもの」は日本では無数に存在し、臨床獣医師の育成の大部分は、就職した病院での卒後教育と個人の努力に依存しているのが現状です。したがって、個々の獣医師の臨床レベルに大きな差が生じ、飼い主の立場から考えると、万人が適切な獣医療を享受することができないという問題が潜んでいるように思います。CSU の学生教育を目の当たりにして、大学が「一定水準に達する獣医師を育成する」という意識を強く感じました。またその教育理念を基に、必要な機材や施設を増やし、必要な人材を確保する努力がなされていました。CSU の附属動物病院は、もちろん日本の病院に比べると施設の規模は非常に大きく、スタッフの数にも雲泥の差があります。しかし単に日本の附属動物病院をスケールアップしただけではなく、病気の患者に高度医療サービスを提供することはもちろんのこと、学生教育を目的とした teaching hospital としての側面が非常に強かったのが印象的でした。

最終日には病院の救急外来を見学させて頂くことができました。金曜日の夕方、ちょうど周辺の病院の受付が終了する時間帯ということもあり、次から次へと患者が運ばれてきました。まず学生が飼い主から問診を聴取し、その後処置室で患者の身体検査を行い、その結果を担当のレジデントと教員に伝えます。そこから教員が学生に対してどのような可能性が考えられるかを質問し、それを受けて学生が鑑別診断を一つずつ挙げていきました。学生が答えた鑑別の中には、その可能性はないだろうという疾患もあったのですが、教員はその場で否定したり詳しく説明したりすることはなく、あくまで学生自身

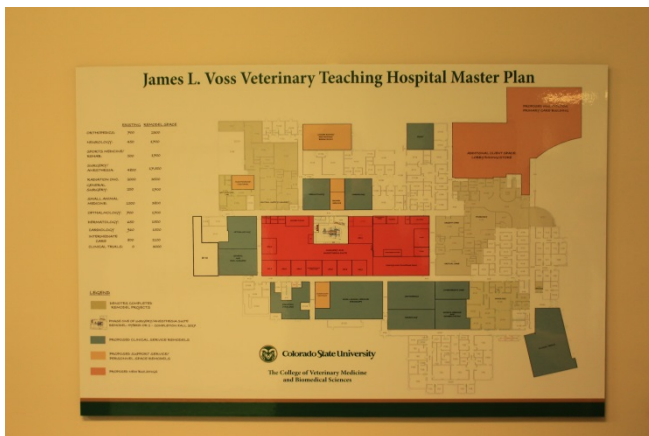


学生（真ん中二人）が問診と身体検査を行い、その結果から鑑別診断をレジデントと教員と4人で話し合っている様子。

臨床教育の実際を知ることができ、非常に参考になりました。

が考えることを促し、忙しい中でも十分にディスカッションの時間を取っていたのが印象的でした。

これはまさに現在日本全国の大学が取り組んでいる参加型臨床実習のモデルケースだと思います。北大でも実践していますが、残念ながら学生のほとんどは「ゲスト」という印象が強く、学生自身が担当医として患者に向き合っているかという点に関してはその意識は薄く、教育効果も不十分だと思います。もちろん日本の学生に非があるわけではなく、ポリクリに至るまでの準備に大きな差があること、私達教員にもポリクリのノウハウが十分浸透していないことが原因だと考えられました。学生の臨床実習を担当する者として、CSUの



動物病院のいたるところに掲示してあるマスタープラン

学生教育以外に強く印象に残っていることとして、病院の方向性を皆で共有するという高い意識が挙げられます。院内の廊下や部屋のいたるところに、動物病院のマスタープランが掲示してありました。内容を見ると、まず今の病院で不足している施設やもっと強化したい部分が書かれており、その達成に向けて既に改築を行った場所、これから5年以内に改築に着手する場所、さらに10年以内には改築する場所などが、色分けされ描かれています。聞けば増改築に必要な財源については確保しているわけではなく、皆で頑張っ

ていこうという姿勢は見習わなければいけないと素直に感じました。しよう、といった感じです。まず財源を確保し、その後どうするか詳細を考えていく事が多い日本の大学とは大きく異なることにまず驚きました。また教員のみではなく、レジデントや病院スタッフ、さらには学生にも病院の方向性を明確に示すことは働くモチベーションにも繋がりますし、現状の問題点を理解してもらえているという安心感にも繋がります。立ち止まらず、常に病院をブラッシュアップしていこうという姿勢は見習わなければいけないと素直に感じました。

この他にも、各診療科の役割分担や入院患者の管理など、私達の大学との違いに驚かされることばかりでした。置かれている状況が異なるので、CSUの取り組みを全て北大に応用するのがいいわけではありませんが、今後の臨床教育と附属動物病院の方向性を考える上で、非常に参考になりました。CSUとの交流事業支援のために、ご寄付を賜りましたダクタリ動物病院東京医療センター総合院長 加藤元先生に感謝申し上げます。また見学を支援いただいた学部長 Stetter 先生、動物病院長 Hackett 先生以下諸先生、Hadley 事務長、松浦様に深謝いたします。